Ⅱ　学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

２．令和元年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.1　人間学部

はじめに

本報告書は、令和元年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 99 科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較できないため、本報告書では扱わないこととする。

（1） 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 1（心理学科 11 科目）、および図 2（コミュニケーション学科 13 科目）にそれぞれ示した。図 1 に示された心理学科の学生の延べ人数は 415 名で、各学年それぞれ 1 年生＝210 名、2 年＝184 名、3 年＝21 名であった。また、図 2 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 358 名で、各学年それぞれ 1 年＝202 名、2 年＝132 名、3 年＝24 名であった。心理学科では、昨年度と比べると、1 項目（授業方法）の評価は全学年において高く、2 項目（授業内容、総合評価）の評価についても 1 年生及び 2 年生において高くなっている。コミュニケーション学科では、昨年度の評価と比べると今年度の評価は全体的に高くなっている。

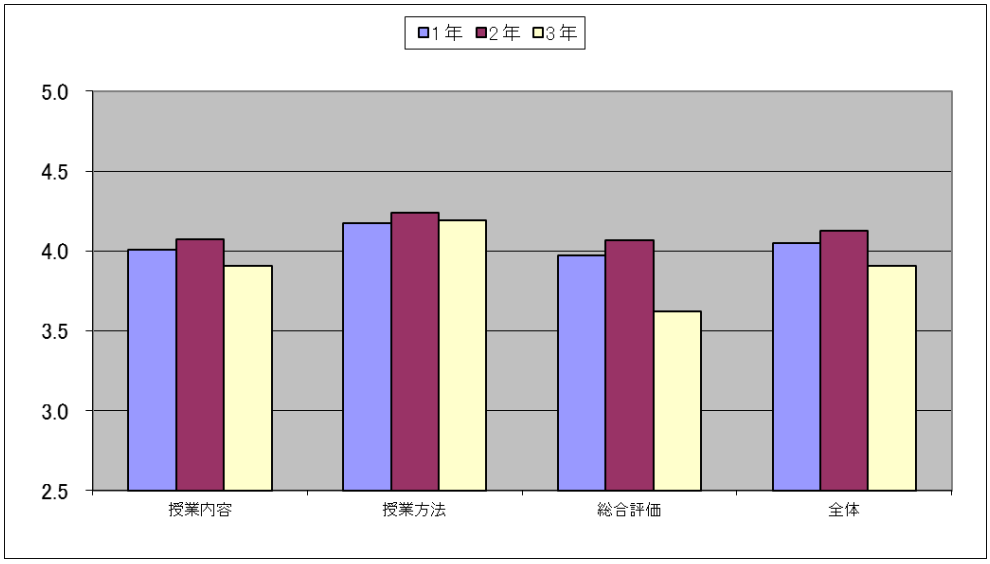

図１　心理学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝210 名、2 年＝184 名、3 年＝21 名

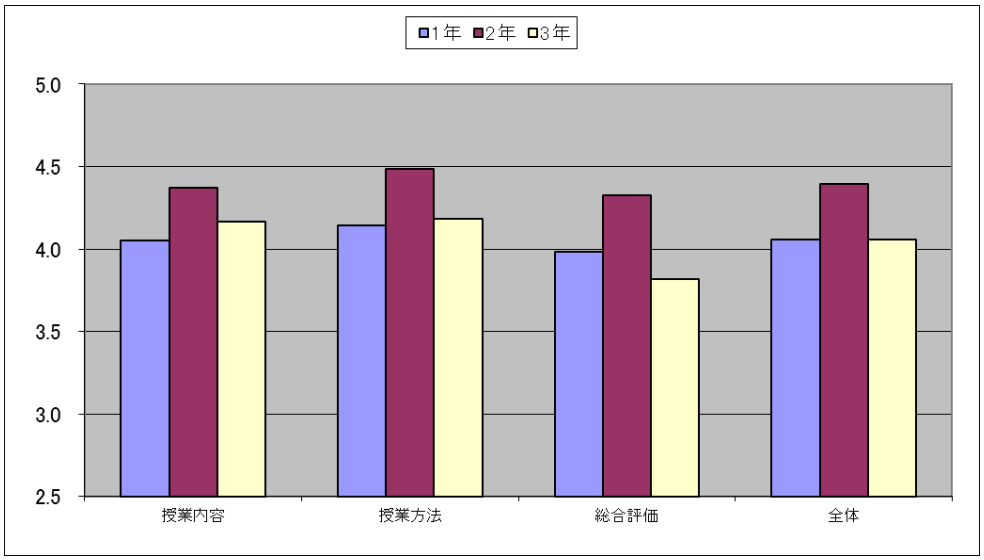

図２　コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝202 名、2 年＝132 名、3 年＝24 名

（２） 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 3（心理学科 13 科目）、および図 4（コミュニケーション学科 15 科目）にそれぞれ示した。図 3 に示された心理学科の学生の延べ人数は 194 名で、各学年それぞれ 1 年＝101 名、2 年＝93 名であった。また、図 4 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 172 名で、各学年それぞれ 1 年＝100 名、2 年＝72 名であった。

心理学科においては、昨年度の評価と比べると今年度の評価は全体的に高くなっている。コミュニケーション学科においては、昨年度の評価と比べると総合評価について 1 年生は高くなっているが、2 年生は低くなっている。

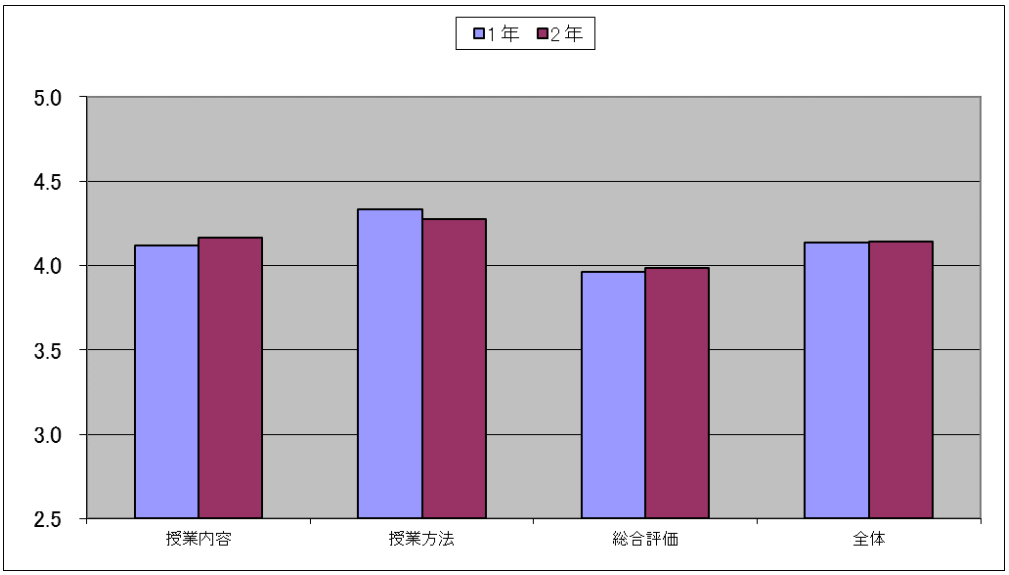

図３　心理学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝101 名、2 年＝93 名

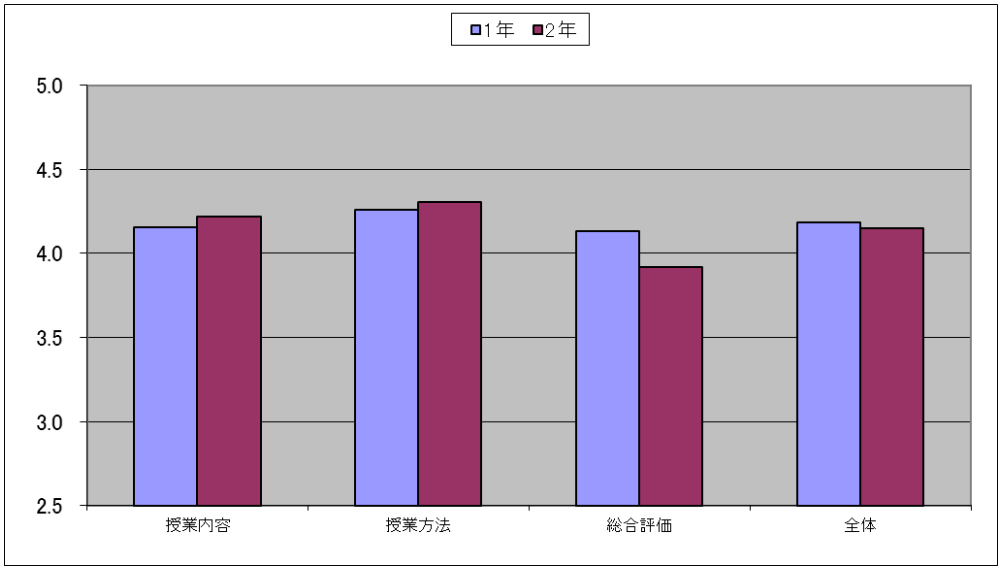

図４　コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝100 名、2 年＝72 名

（３） 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 23 科目、コミュニケーション学科 47 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1,284 名で、各学年それぞれ 1 年＝419 名、2 年＝440 名、3 年＝380 名、4 年＝45 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 1,130 名で、各学年それぞれ 1 年＝459 名、2 年＝460 名、3 年＝178 名、4 年＝33 名であった。

心理学科においては、昨年度の評価と比べると今年度の評価は 1 年生、3 年生、4 年生が全体的に高くなっている。一方で、2 年生の評価が全体的に低くなっている。コミュニケーション学科においては、昨年度の評価と比べると今年度の評価は 4 年生が全体的に高くなっており、1 年生、2 年生、3 年生は昨年度の評価とほぼ同じであった。

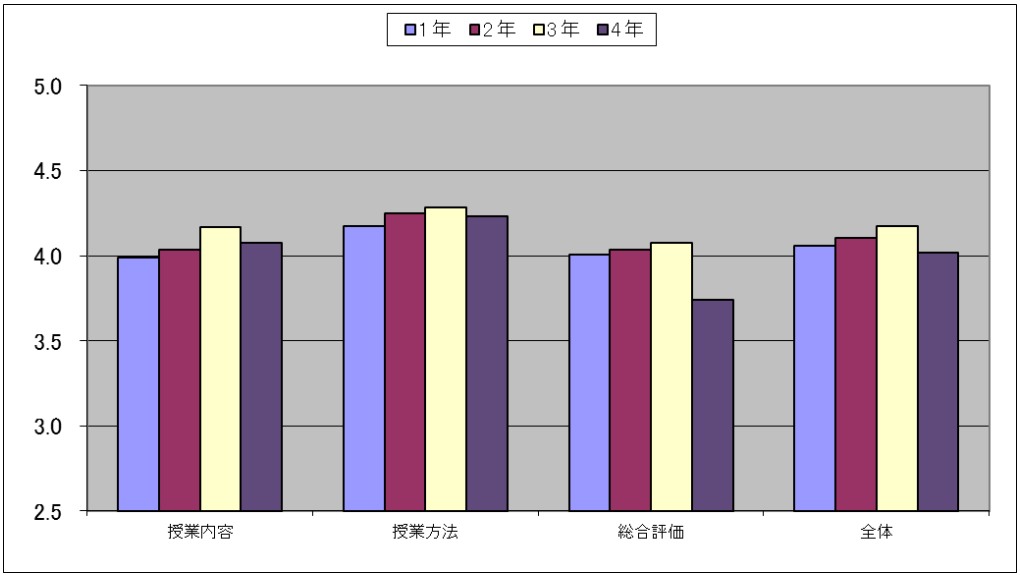

図５　心理学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝419 名、2 年＝440 名、3 年＝380 名、4 年＝45 名

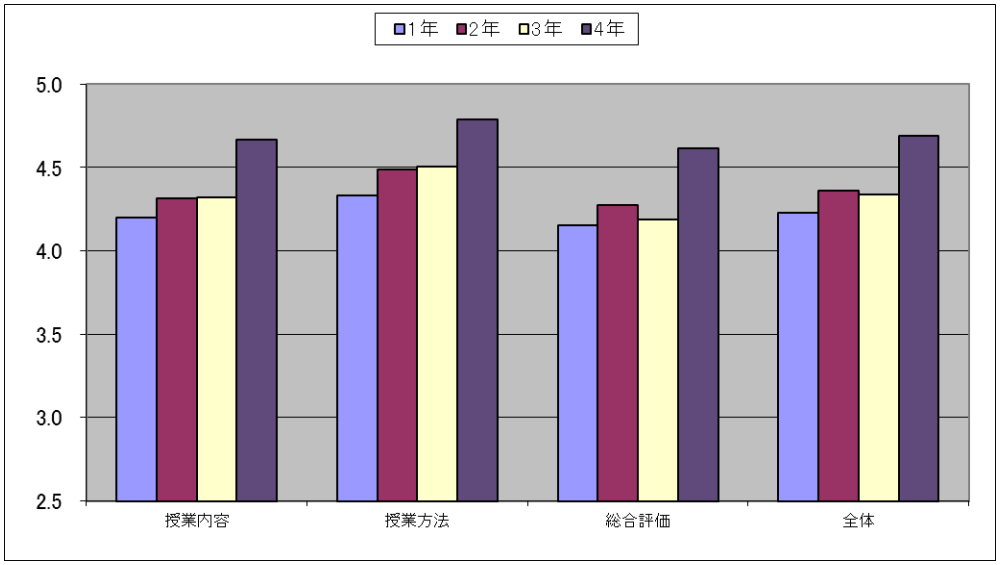

図６　コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数　1 年＝459 名、2 年＝460 名、3 年＝178 名、4 年＝33 名

（４） 共通科目と専門科目の比較

本節以降 7 節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は 99 科目であったが、学部共通科目 15 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図 7 は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ 9、21 科目、コミュニケーション学科では、11、43 科目であった。

心理学科においては、昨年度と同様、履修形態による違いはほとんど見られなかった。一方、コミュニケーション学科においては、昨年と同様、専門科目の方が高い評価が得られていると言える。

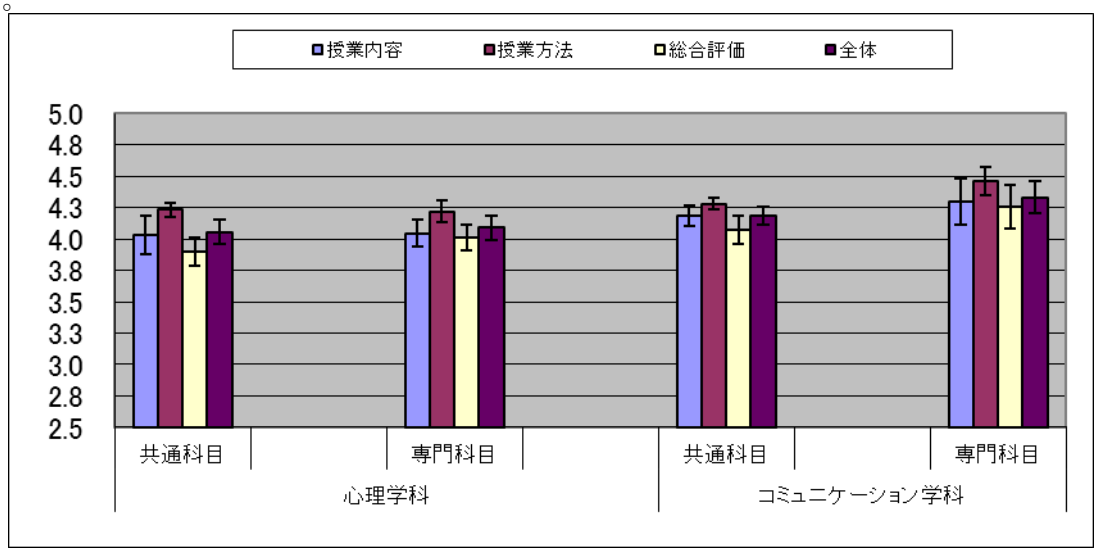

図７　共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）

（5） 必修科目と選択科目の比較

図 8 は別の履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ 8、22 科目、コミュニケーション学科では、12、42 科目であった。本年度は両学科ともに選択科目の評価の方が高い傾向にある。心理学科では必修科目、選択科目の双方で評価点が上昇している。コミュニケーション学科においても、必修科目、選択科目の双方で評価点が高くなっているが、選択科目の評価点の上昇の幅が大きくなっている。

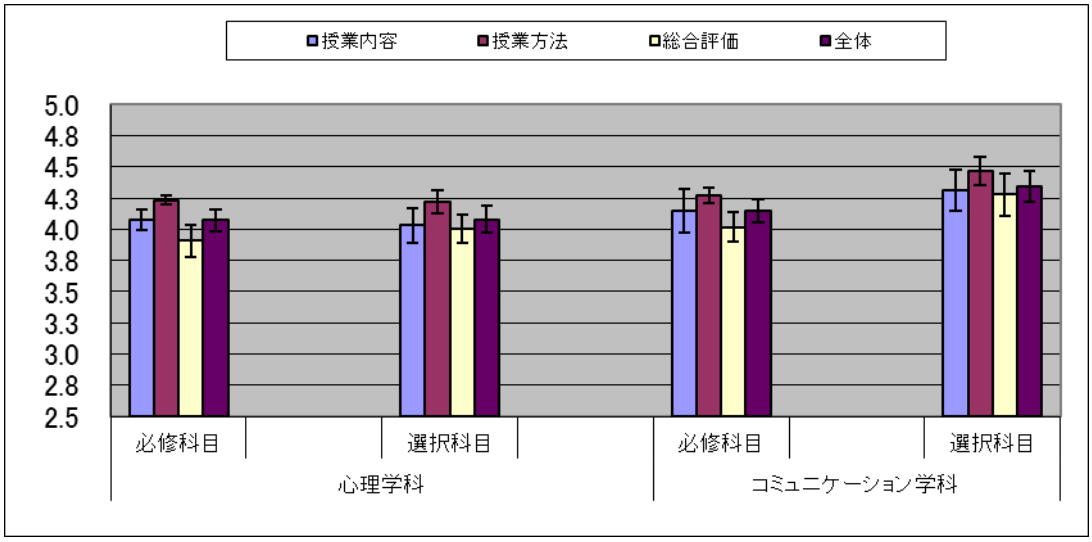

図８　必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）

（6） 科目の履修者数による比較

図 9 は履修者数（履修者が 40 名未満の科目と 40 名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40 名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が 40 名未満の科目および 40 名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ 8 科目、22 科目、コミュニケーション学科では、36 科目、18 科目であった。

心理学科、コミュニケーション学科の両学科とも、本年度は履修者数による違いはほとんど見られなかった。

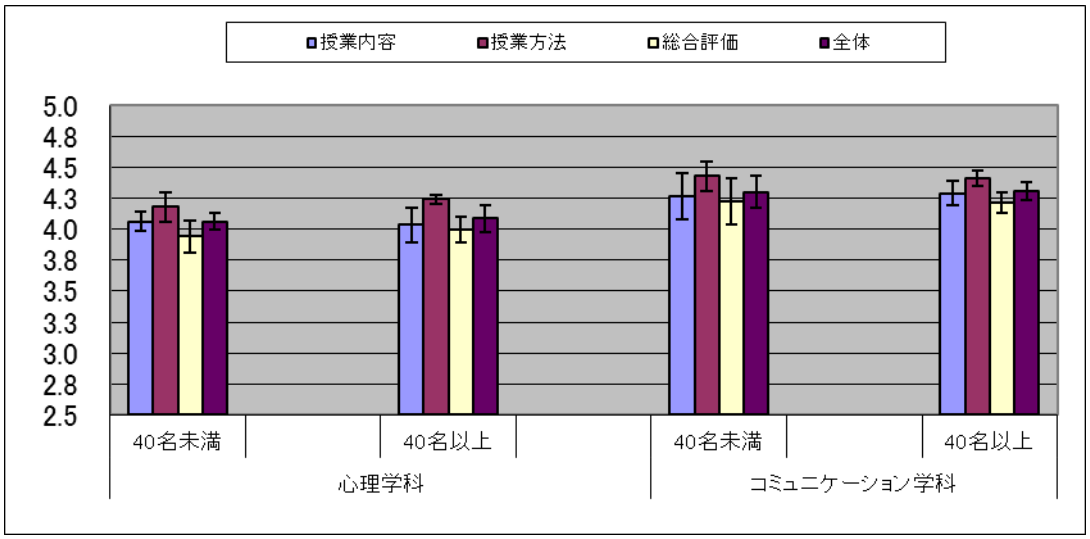

図９　受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図 10（心理学科）と図 11（コミュニケーション学科）である。

心理学科ではほとんど相関は見られなかった（心理学科 r ＝0.16, 昨年度 r= 0.09）が、コミュニケーション学科では、昨年度同様に弱い負の相関（ r ＝－0.16、昨年度 r=－0.0）が見られた。

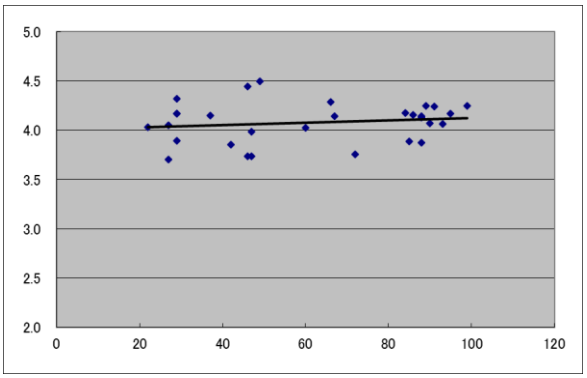

図 10　心理学科　履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
r ＝0.16　(n=30)

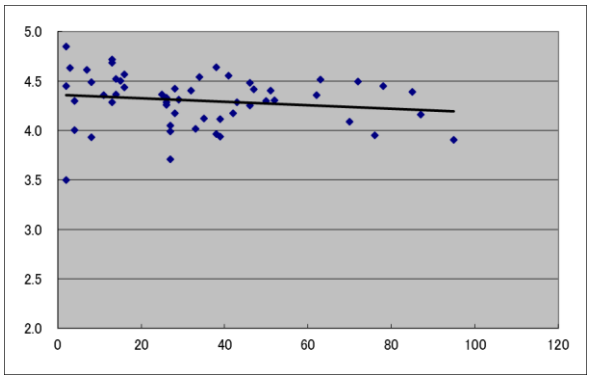

図 11　コミュニケーション学科　履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
r ＝－0.16　(n=54)

（7） 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図 12 に示した。それぞれの科目数は心理学科が 3、6、21 科目、コミュニケーション学科が 4、7、43 科目であった。両学科ともにすべての科目において回収率は概ね 80%を上回っており、高い回収率が今年度も維持されていることが示された。

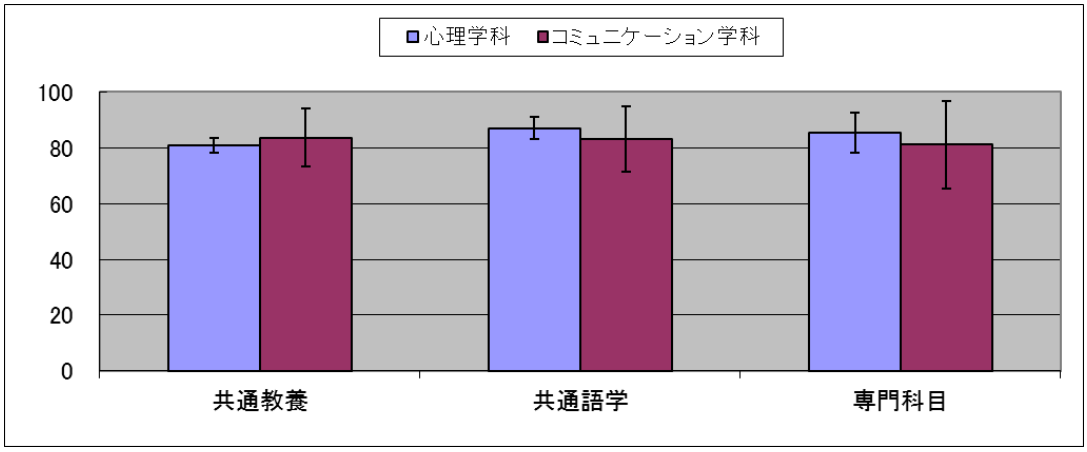

図 12　各科目の平均回収率（±SD）（%）

（8）学修時間と学修行動

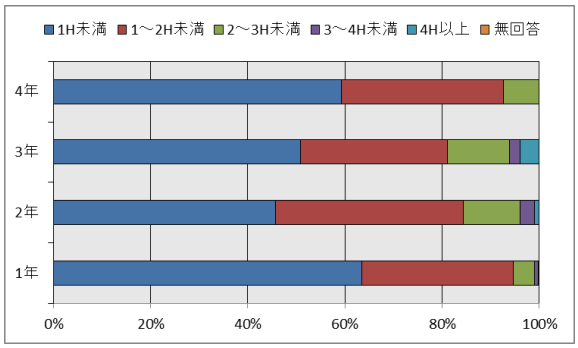

図 13　心理学科の授業外での学修時間

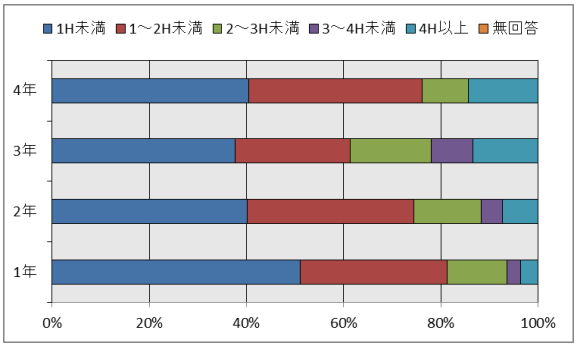

図 14　コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、授業時間以外でその科目に関する学習時間が 1h 未満の学生が両学科どの学年においても大きな割合を占めており、これらの傾向は昨年と同様である。ただし、両学科とも 4 年生の学修時間、特に 3～4h、4h 以上の学生が少なくなっている点は今後の検討課題と言えよう。いずれの学科、学年においても学習時間が多いとは言えず、今後授業外での学修時間についてどのようなことをすべきであるのか、授業内での指導やシラバスなどによる課題の指示など対策が必要であると思われる。

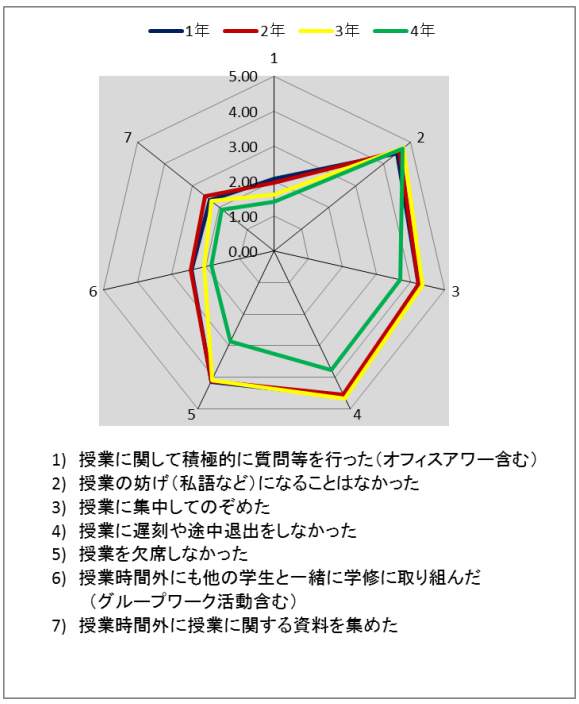

図 15　心理学科の学修行動

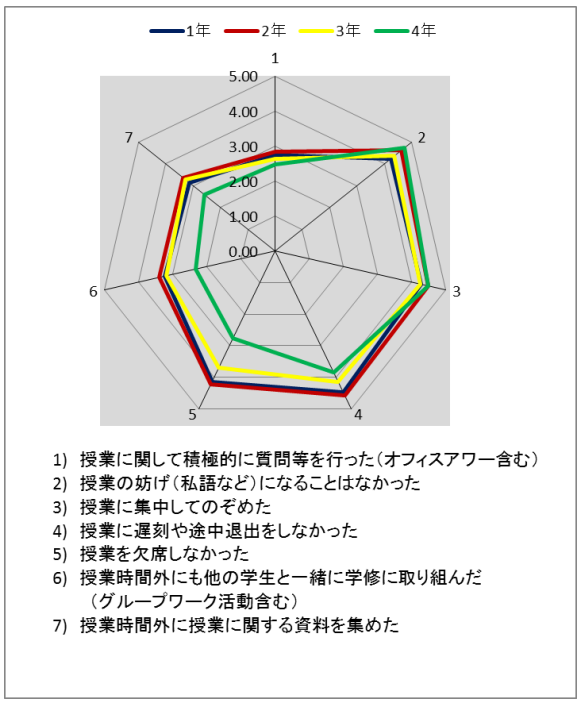

図 16　コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学習行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。両学科とも、4 年生を除き、授業時間内での学修行動に関する評価は非常に高くなっており、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。また、授業に関して質問をした、授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ、授業外に授業に関する資料を集めたなど授業時間以外での学修行動（質問 1、6、7）は昨年度に続き両学科ともに低くなっている。さらに、心理学科の 2 年生および 3 年生においては、昨年度に比べ、授業に集中してのぞめた、授業に遅刻や途中退出をしなかったなど授業時間内での学修行動（質問 3、4）に関する評価は高くなっている。

（報告：升田　法継）

Ⅱ　学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

２．令和元年度後期末授業評価アンケート調査結果

2.2　人間生活学部

はじめに

本報告は、令和元年度後期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 120 科目についてまとめたものである。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う 2 項目、授業及び学修に関する 18 項目（評価基準は 1～5 点）の計 20 項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計 18 項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

設問群①：「授業内容」　4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設問群②：「授業方法」　3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設問群③：「総合評価」　3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
設　問④：「学修時間」　1 項目（1h 未満、2h 未満、3h 未満、4h 未満、5h 以上）の比
設問群⑤：「学修行動」　7 項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として 10 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いることで検討できることもあると考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「平成 31 年度仁愛大学 FD 推進活動報告書」を御覧ください。

（1） 共通教養科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 10 科目から回答を得た（図 1 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 288 名、2 年生が 56 名、3 年生が 12 名であった。

1 年生は「授業方法」が 4.0 以上、それ以外の項目は 4.0 未満であった。2、3 年生は、全ての項目で 4.0 以上であった。

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 11 科目から回答を得た（図 2 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 168 名、2 年生が 82 名であった。

1 年生は全ての項目が 3.5、2 年生は全ての項目で 4.0 以上であった。

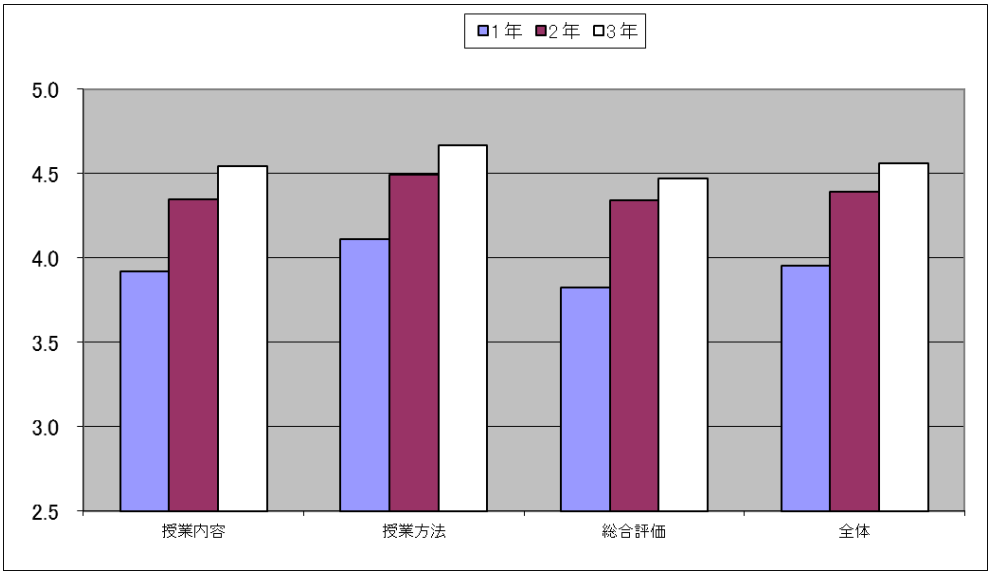

図１　健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝288 名、２年＝56 名、３年＝12 名

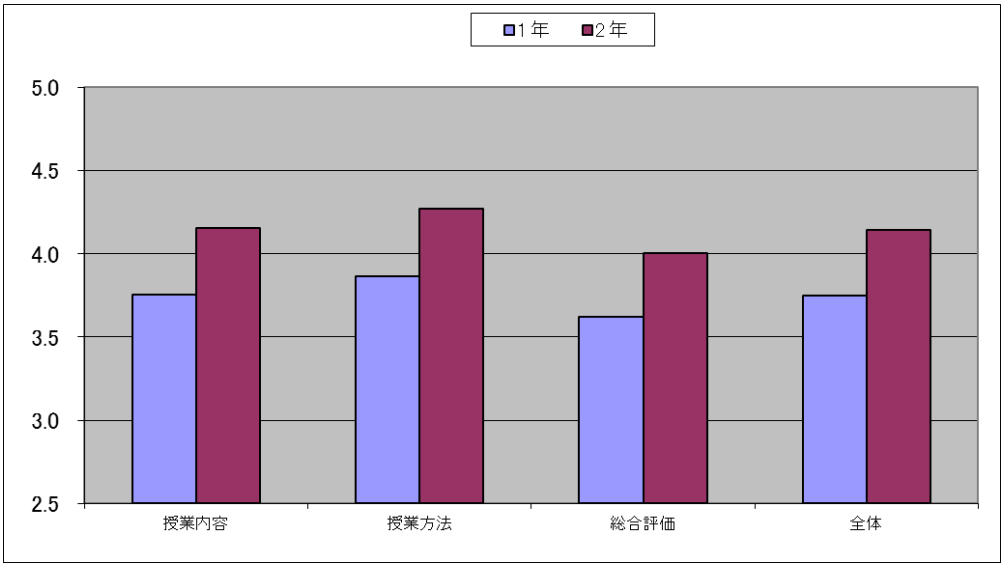

図２　子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝168 名、２年＝82 名

（２） 共通語学科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において 8 科目から回答を得た（図 3 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 118 名、2 年生が 15 名であった。

1、2 年生で「総合評価」以外の項目で 4.0 以上であった。

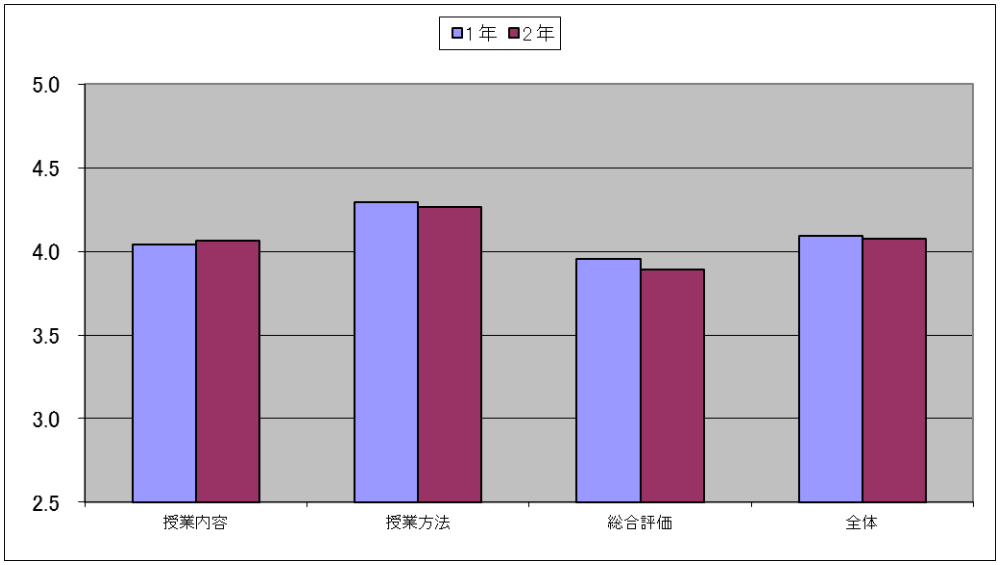

図３　健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝118 名、２年＝15 名

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において 8 科目から回答を得た（図 4 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 87 名、2 年生が 16 名であった。

2 年生は全ての項目が 4.0 以上であった。1 年生は「総合評価」と「全体」が 4.0 を下回った。

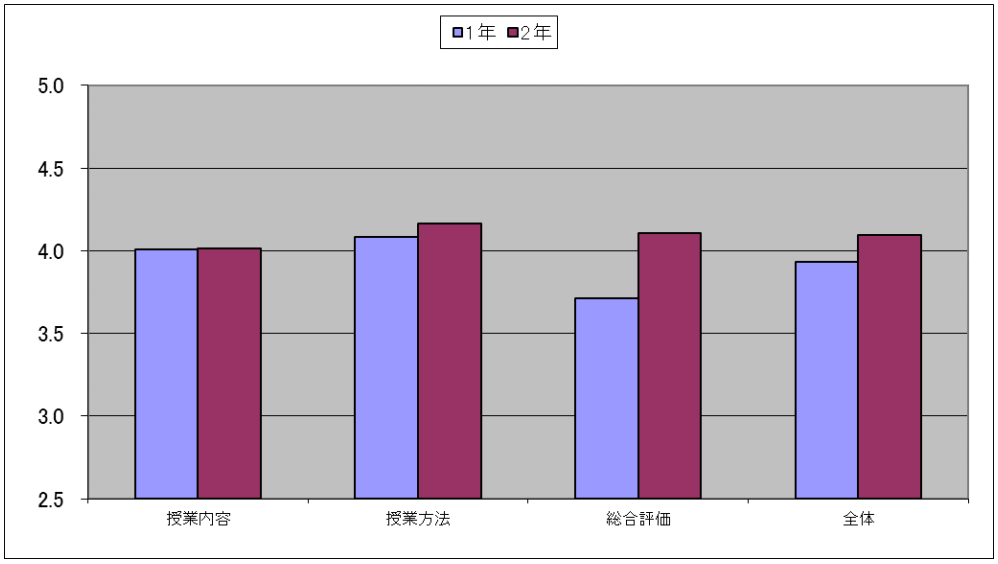

図４　子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数　１年＝87 名、２年＝16 名

（3） 専門科目

［健康栄養学科］

健康栄養学科学生が受講する専門科目において 52 科目から回答を得た（図 5 参照）。延べ回答人数は、1 年生が 559 名、2 年生が 631 名、3 年生が 458 名、4 年生が 40 名であった。2～4 年生で、4 年生の「総合評価」を除き全ての項目で 4.0 以上であった。

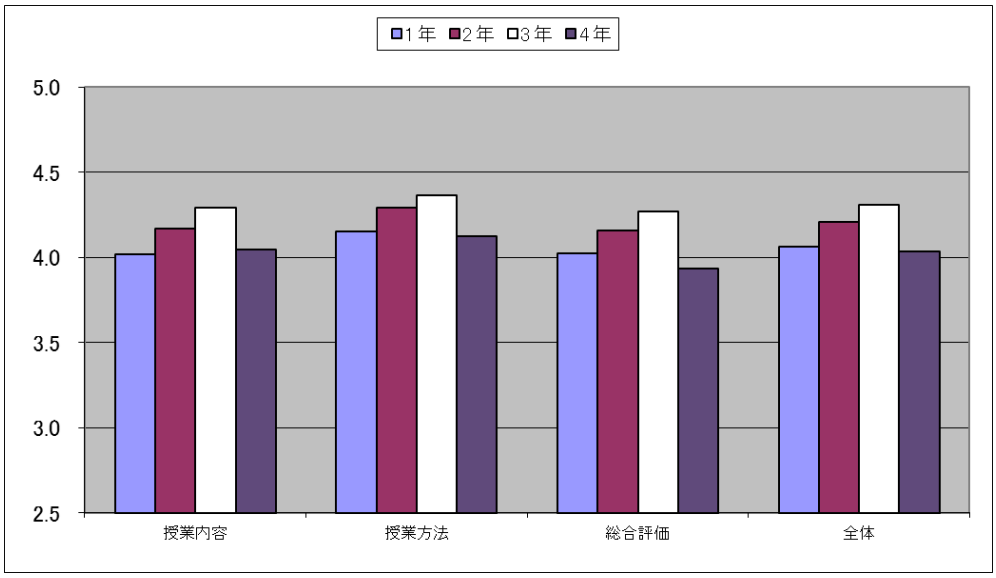

図 5　健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数　1 年＝559 名、2 年＝631 名、3 年＝458 名、4 年=40 名

［子ども教育学科］

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、52 科目から回答を得た（図 6）。述べ回答人数は、1 年生が 386 名、2 年生が 406 名、3 年生が 354 名、4 年生が 62 名であった。

全ての学年において全ての項目で 4.0 以上であった。

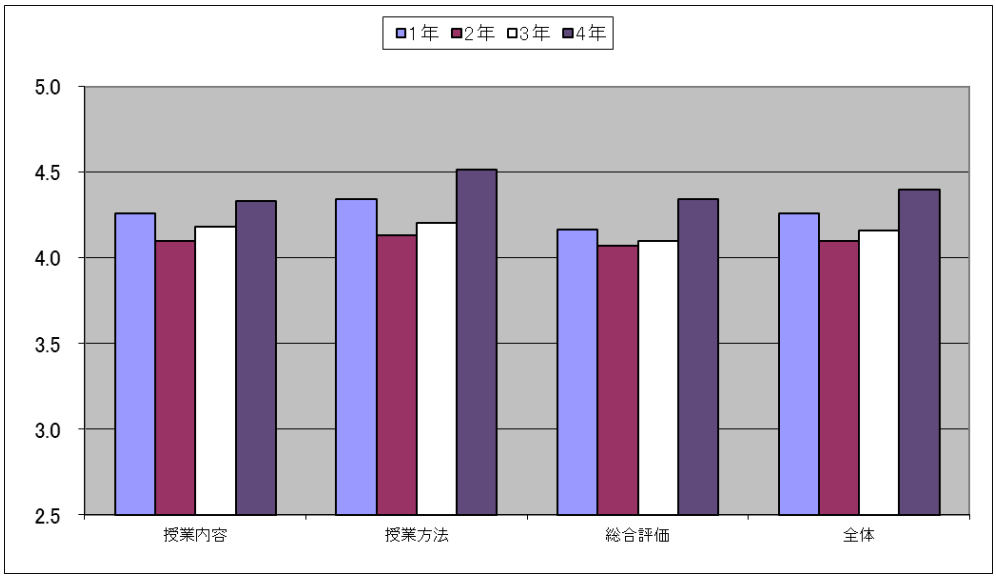

図 6　子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点

延べ人数　1 年＝386 名、2 年＝406 名、3 年＝354 名、4 年=62 名

（4） 科目の種類ごとによる比較

科目を以下の 3 つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

・共通科目と専門科目

・必修科目と選択科目

・受講生が 40 名未満の科目と 40 名以上の科目

［共通科目と専門科目の比較］

図 7 は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は 108 科目である。なお、学部共通科目 12 科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目ともに全ての項目で 4.0 以上であった。

子ども教育学科は、昨年度と同様の傾向で、すべての設問において共通科目より専門科目での評価が高く、共通科目は全設問の平均評価点が 4.0 程度、専門科目は 4.3 程度であった。

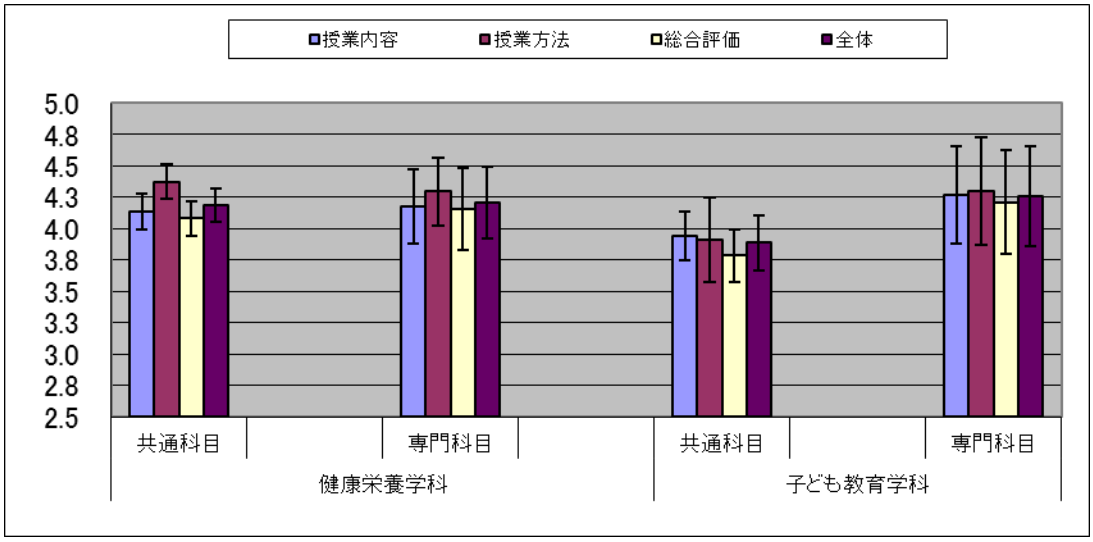

図 7　共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）
共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で 6、49 科目、
子ども教育学科で 5、48 科目

［必修科目と選択科目の比較］

図 8 は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は 108 科目である。

健康栄養学科では、必修科目と選択科目の各設問の平均評価点はおおよそ 4.0～4.3 の範囲内にあり、ほぼ同じ傾向であった。

子ども教育学科では、必修科目の各設問の平均評価点は 4.0 程度に集中し、選択科目は 4.3 程度に集中していた。

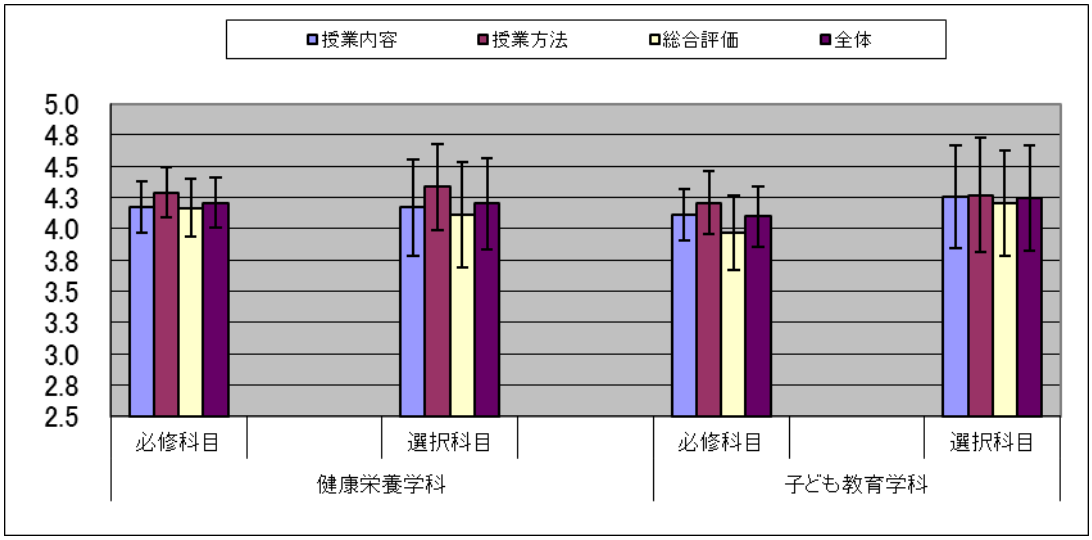

図８　必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）
必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で 35、20 科目、
子ども教育学科で 7、46 科目

［受講生数による比較］

図 9 は、受講生が 40 名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は 108 科目である。

健康栄養学科での各設問の評価は、40 名未満と以上の科目における平均評価点はどちらも 4.0 以上であり、40 名未満においてやや高めの平均評価点を示していた。

子ども教育学科での各設問の平均評価点は、40 名未満の科目においてすべての項目で 4.3 以上、40 名以上の科目において 4.0 未満であった。

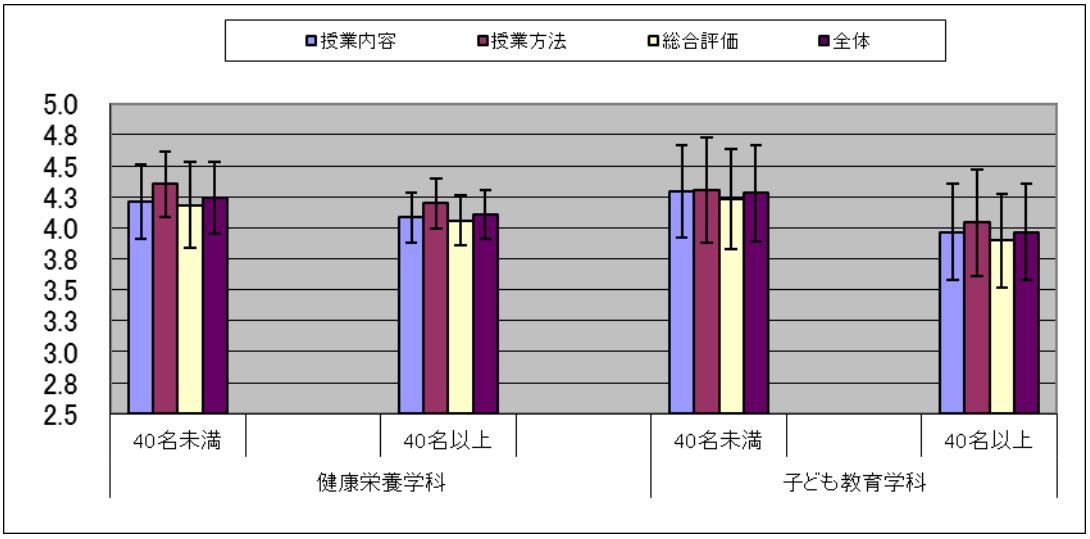

図９　受講生数による各科目の平均授業評価点（±SD）
40 名未満、40 名以上の科目数は、健康栄養学科で 39、16 科目、
子ども教育学科で 44、9 科目

［科目個々の受講者数と評価点との関係］

図 10～12 は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が r＝－0.28 であった。昨年度全体の相関は r＝－0.12 であった。学科別にみると健康栄養学科は r＝－0.19、子ども教育学科は r＝－0.31 であった。

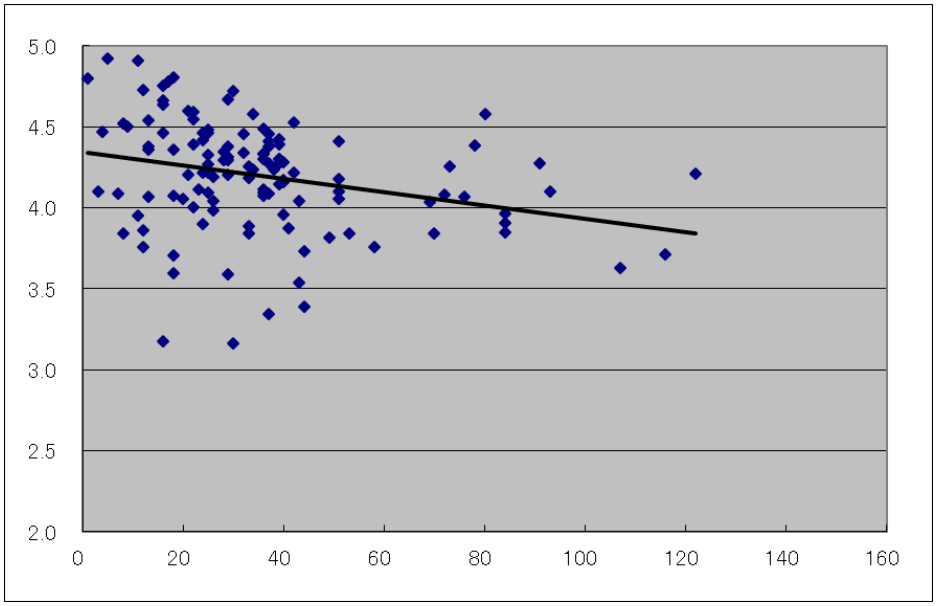

図１０　人間生活学部　履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
r ＝－0.28　(n=120)

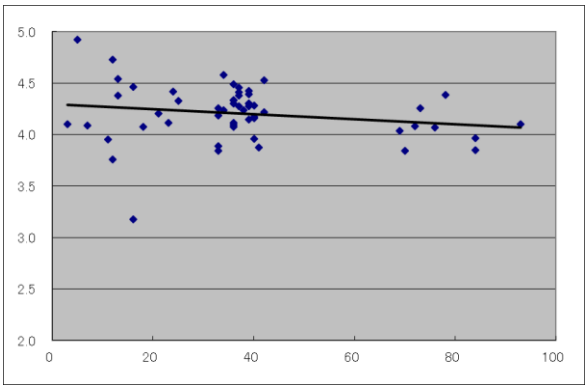

図１１　健康栄養学科
r ＝－0.19（n=55）

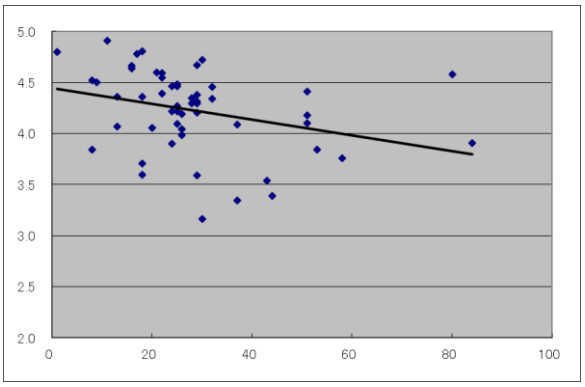

図１２　子ども教育学科
r ＝－0.31　(n=53)

［各科目の回収率］

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図 13 に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が 2、4、49 科目、子ども教育学科が 2、3、48 科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は子ども教育学科の共通教養科目で 80%未満であった以外は、80%以上であった。

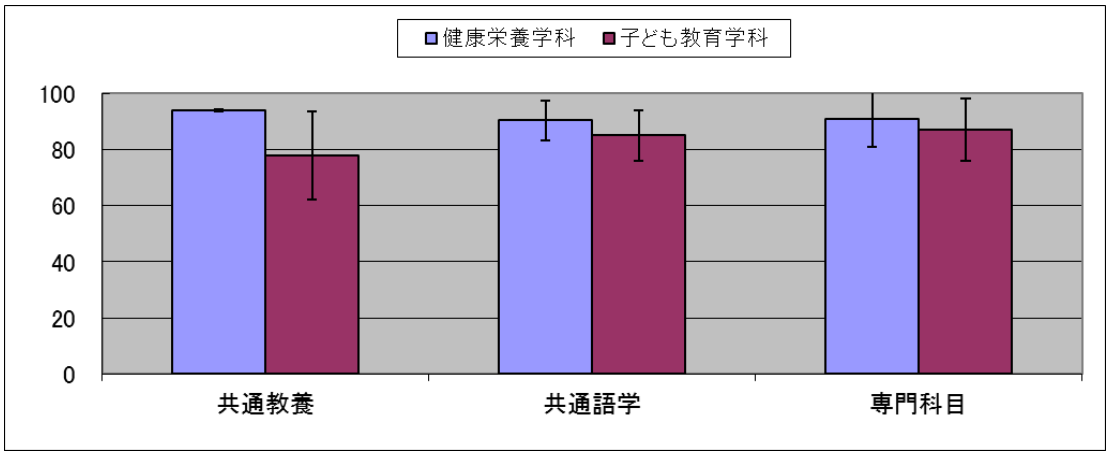

図１３　各科目の平均回収率（±SD）（%）
それぞれの科目数は、健康栄養学科で 2、4、49 科目、
子ども教育学科で 2、3、48 科目

（５） 学外での学修時間

［健康栄養学科］

図 14 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は 1 年生が 965 件、2 年生が 702 件、3 年生が 470 件、4 年生が 41 件であった。1 年生は 1 時間未満が約半数、2 年生と 3 年生は約 40%となっており、2 時間以上の者の割合は 1・2 年生 20%程度、3 年生で 35%以上となっていた。

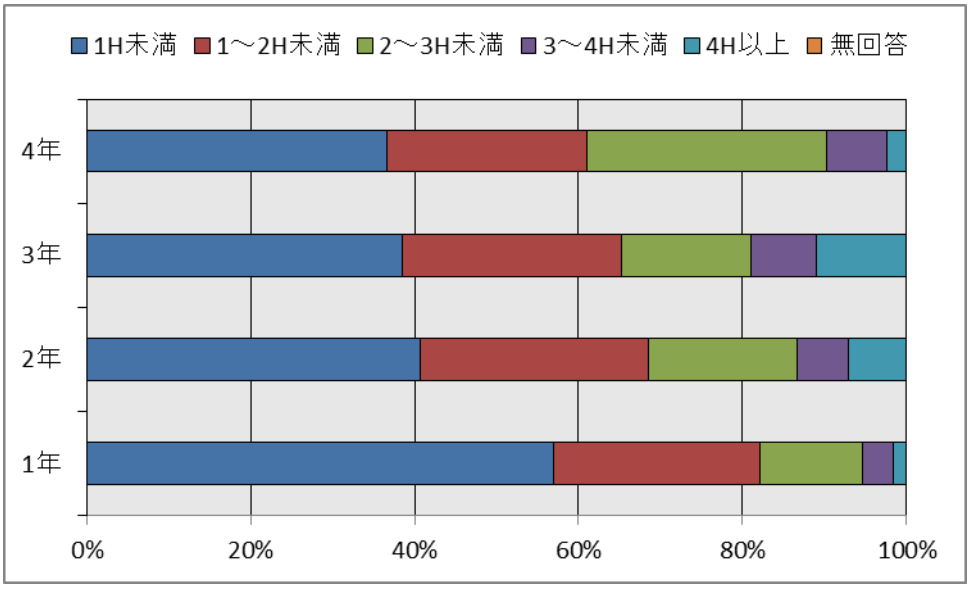

図１４　健康栄養学科の授業外での学修時間

［子ども教育学科］

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1 年生が 641 件、2 年生が 504 件、3 年生が 365 件、4 年生が 64 件であった。1 時間未満の比率が 1、3 年生では 55%程度、2 年生では 35%程度であった。

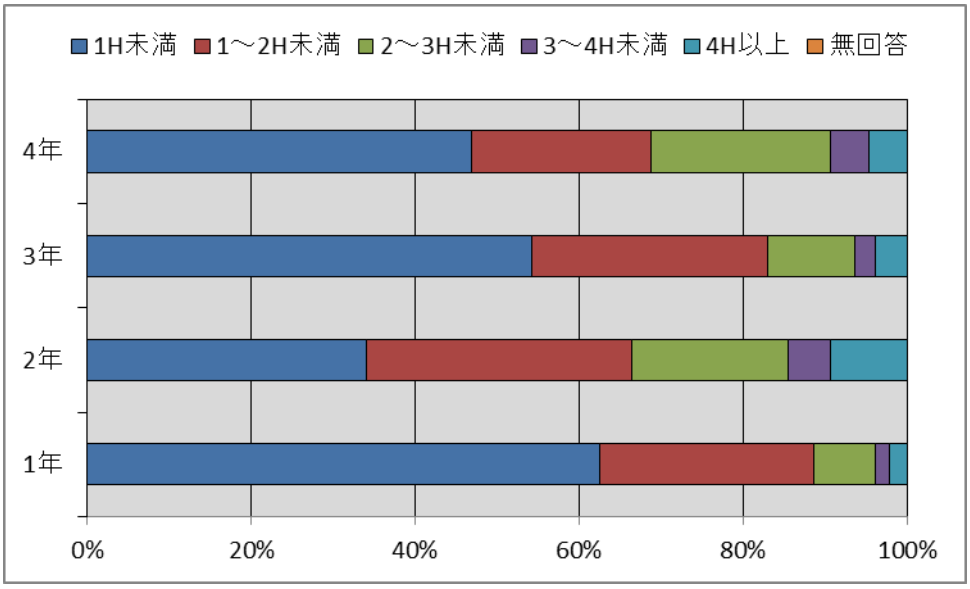

図１５　子ども教育学科の授業外での学修時間

（６） 学修行動について

［健康栄養学科］

図 16 は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」、「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」は 3 年生が他の学年に比べやや高い値を示していた。

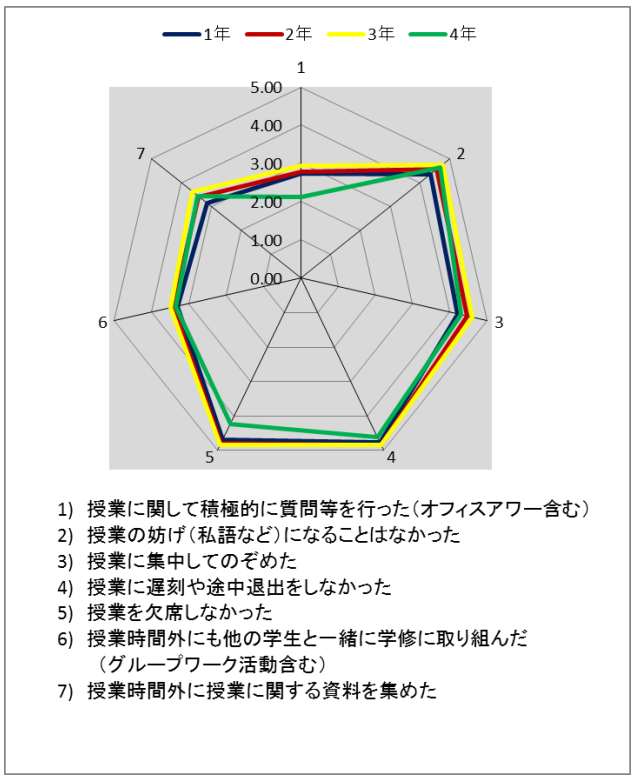

図１６　健康栄養学科の学修行動

［子ども教育学科］

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。全体的に昨年度と同様の傾向であるが、1 年生の「授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ」、「授業時間外に授業に関する資料を集めた」については 3.0 程度となっていた。

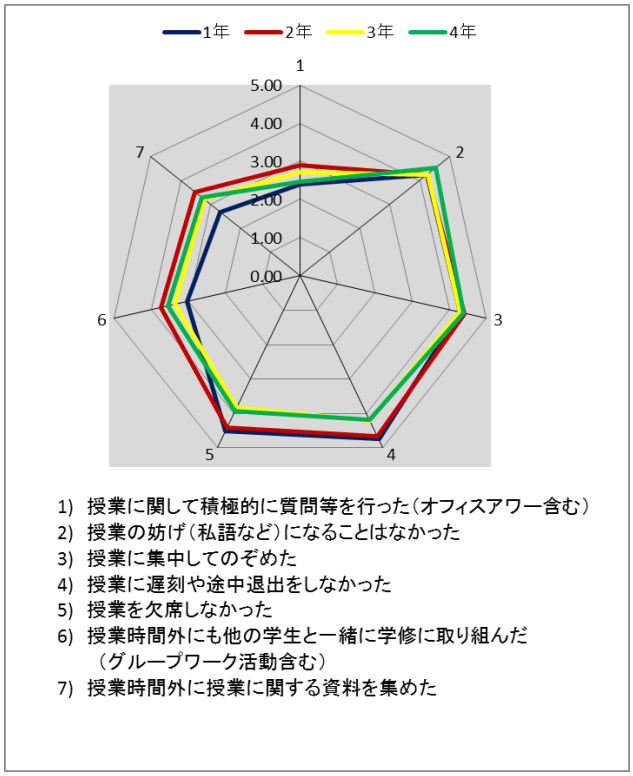

図１７　子ども教育学科の学修行動

（７）まとめ

令和元年度後期における人間生活学部の授業評価アンケート結果を様々な角度から集計し概観した。評価は学科や学年によって異なる特徴があることが昨年度と比較することにより推察された。各々の科目の授業の質を高く保つことは当然重要として、学生の授業に対する意欲や関心、満足度をどのように、どこまで高めていくか考えていく必要があると考えられる。また、大学生に求められる学修方法や姿勢が 1 年生前期に身に付くよう意図的・具体的に伝え、学生が自主的な学修に取り組めるよう授業内容や課題を工夫して導いていくことは重要で、今後も成績と評価との関連性についても解析し検討することが必要と思われる。

（報告：出村　友寛）

Ⅱ　学生による学期末授業評価アンケート調査結果報告

3．令和元年度 大学院授業評価アンケート調査結果

3.2　後期末授業評価アンケート調査結果

はじめに

本報告書は、令和元年度後期に開講された科目の内、院生による授業評価が実施された８科目についてまとめたものである。今年度も学部と同じ５段階評価による授業アンケートを実施した。なお、今年度より Web 方式による記名式となっている。得られた結果について、授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点に関して検討した。また、担当者独自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

（１） 必修科目と選択科目の比較

図１は履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を示したものである。分類した必修科目数は３科目、選択科目数は５科目であった。ほぼすべての項目において、評定点が概ね 4.5 を以上になっており、昨年度後期よりも高い評価がされていることがわかる。履修形態を比較すると、必修科目と選択科目にあまり差がなく、いずれも授業内容が少し高いのが特徴といえる。また、必修科目については、昨年度後期よりもかなり高い評価がされており、授業改善の効果が表れている。本学大学院の必修科目は、公認心理師資格や臨床心理士資格に関わる科目であり、厳しい指導がなされていると考えられるが、選択科目と比べて同等の高い評価点を得ているということは、授業として適切な教育が行えていることを示していると言えよう。

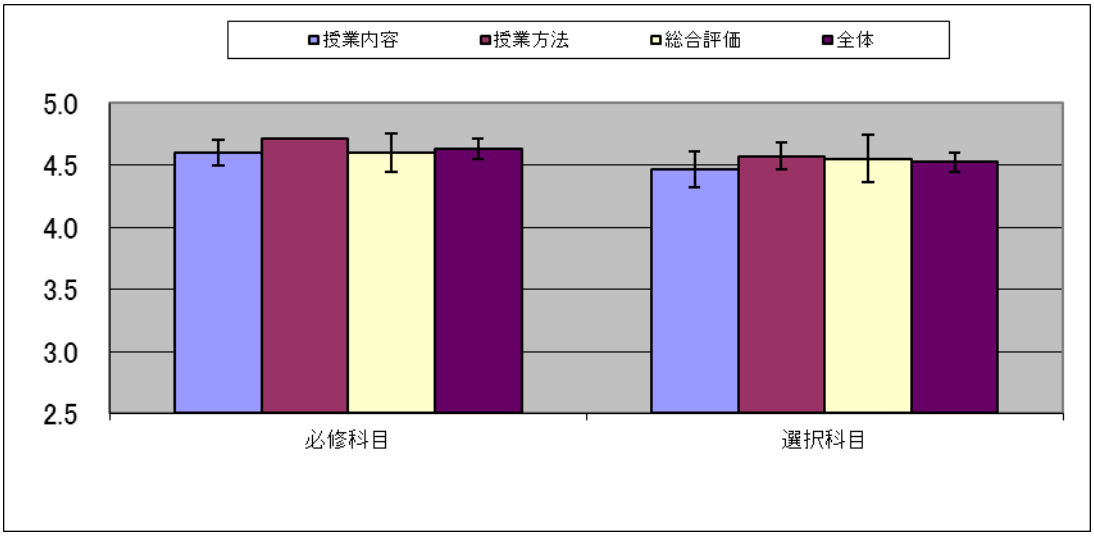

図１　共通科目と専門科目別の平均授業評価点（±SD）
必修科目と選択科目数は、3、5 科目

（2） 講義科目と演習・実習科目の比較

大学院の授業に関して、特に公認心理師や臨床心理士養成の要ともいえる演習・実習科目は重要なものであり、課題等の院生に対する負荷も大きいと考えられる。また、昨年度より導入された公認心理師科目によって、演習・実習科目の重要性や院生への負担が増している。そのため授業形態ごとの比較を行った。

図 2 は授業形態ごと（講義科目と演習・実習科目）の評価点を示したものである。分類した講義科目数は 6 科目、演習・実習科目数は、2 科目であった。講義科目において各項目の評定点は 4.5 以上であり、全般的に高い評価がされていることがわかる。また、昨年度後期に比べて講義科目については 0.2 ポイント以上、演習・実習科目については 0.5 ポイント以上評価点が高くなっており、昨年度講義科目に比べ低い評価であった演習・実習科目の評価が講義科目と同等になっていた。この結果は、特に演習・実習科目において授業方法が改善されたことを如実に物語っているといえる。

大学院は、カリキュラム改正 2 年目となり、新規科目も含め授業の充実が図られているといえよう。演習・実習科目は、科目によっては教員が複数担当しきめ細やかな指導を行っているが、そういった密な指導体制と院生の意識の高さから、充実した授業が展開されていると推察される。今後も高い評価が得られるよう、担当教員に期待したい。

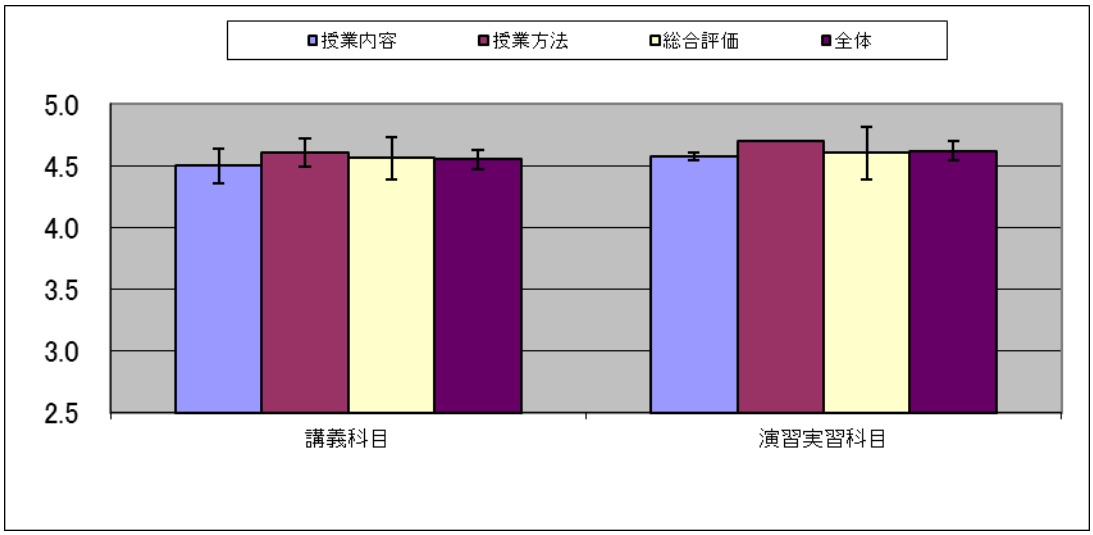

図２　講義科目と演習実習科目別の平均授業評価点（±SD）
講義科目と演習実習科目数は、6、2 科目

（報告：杉島一郎）